

## 会員紹介：湊直信さん

### 私の略歴



1975年慶応義塾大学経済学部を卒業し、第一勧業銀行に勤務。1989年、国際開発分野を目指して銀行を退職して新潟県南魚沼市にある国際大学大学院に入学、国際関係、国際開発を学ぶ。修了後、1年間国際大学の研究プロジェクトでODAの経済的インパクト分析を行い、1991年6月より国際開発高等教育機構（FASID）に勤務。18年半の間、主に、国際開発分野での研究、教育、コンサルティングに携わる。2011年より公募により外務省国際協力局ODA評価室長に就任。外務省を退職した後、国際開発分野で研究、教育、コンサルティングに携わり、現在に至っ

ている。

### 従事した仕事の内容

#### 金融から開発へ

第一勧業銀行に入行当時、日本の国際金融市場が大きく飛躍すると考え、国際業務を希望し、実際に本部と支店で輸出、輸入、送金、外貨預金に関する業務、外国為替の相談業務、国際業務に関する研修等を担当した。1985年ごろには開発途上国向けの延払い輸出の管理や、カントリーリスクなども扱い、開発途上国の状況に強い興味を持った。ちょうどその頃、ネパールからの留学生で国際基督教大学を卒業した妻と出会い、結婚した。初めてネパールへ行き、途上国の状況とそこで仕事を行っている援助機関に強い関心を持った。



冬の国際大学

そのような状況で、縁のあった大来佐武郎先生のご紹介でSRIDに参加させて頂いた。毎月セミナーに参加しているうちに、バブル期の金融、銀行業より開発や途上国の課題に取り組む方が有意義で、面白いと感じた。1988年には新潟県の浦佐に開設された国際大学を見学しに行った。丁度、学園祭が開催されており、教授陣や学生と話をした。翌年、1989年5月には銀行を退職して国際大学に入学した。これは、収入は多いが時間のない都会の生活から、収入は少ないが時間が十分にある田舎の生活へのライフスタイルの大転換でもあった。国際大学は大学院のみの全寮制大学で、講義は全て英語で行われ、半分以上の学生は外国人であった。講義だけでなく、日

常生活においても付き合いが深まり、今でも連絡を取り合っている友人も多い。

### 研究・教育・コンサルティングの相乗効果を

銀行を退職した後、ニューヨークのファイナンシャル・プランナー事務所を訪ねたことがある。そのファイナンシャル・プランナーは事務所でコンサルティングを行う傍ら、近くの大学で研究と教育を行っていた。彼によれば、研究成果をコンサルティングと教育に使用し、コンサルティング経験を研究と教育に使い、教育現場での問題意識をコンサルティングと研究に使用しているとのことであった。つまり、研究、教育、コンサルティングの相乗効果を生み出すということである。私は、これを国際開発の分野で行おうと思った。最初はそれぞれがバラバラであったが、次第に連携ができるようになった。1992年にFASIDに就職した。FASIDは設立2年後でまだ職員は10人前後であったが、斬新性と活力にあふれていた。私はFASIDの特徴を迅速性、柔軟性、そして民間企業、大学、NGO等のネットワークのハブになることを目指した。公的セクターの弱点を逆手にとって、国際開発分野でFASIDに強いリーダーシップを持たせようと考えた。

### 研究

大学院での修士論文テーマはマレーシアにおける海外直接投資の開発へのインパクトであった。1985年のプラザ合意による円高、労働者不足に直面した日本企業は製造拠点を国内から海外に移転させていた。マレーシアも直接投資の集中していた国の一つであり、このような現地生産の拡大がホスト国、現地社会、コミュニティへ与えるインパクトを1か月間マラヤ大学に滞在して調査した。マレーシアの研究をしていた関係上、アジア経済研究所が実施したEAEG（東アジア経済圏構想）の研究も行った。EAEGはAPEC（アジア太平洋経済協力）に比べると、米国との関係が薄い等の弱点が多いとの結論に至った。国際大学とジョンホプキンス大学との共同研究プロジェクトでは日米経済関係を担当した。また、アジアにおける日本のODA、直接投資、輸出入、生産量、経済成長の関係を回帰分析により探った。結果、中国とインドネシアでは有意な結果が出たために、それをThe Journal of Econometric Study of Northeast Asia (JESNA)で発表した。



経済特区の候補地である  
インドネシア、ロンボック島

FASIDでは参加型プロジェクト計画手法であるPCM (Project Cycle Management)、PDM (Project Design Matrix) とDAC評価5項目を組み合わせたプロジェクト評価手法、政策プログラムの評価手法の開発に携わった。1993年には事例教材を作成するためにジンバブエを訪問したが、作成した“*Selecting Approaches for Development on the Communal Lands in Zimbabwe*”は現在ワシントン大学のThe Electronic Hallwayに掲載されている。

1992年以降、毎年、国際開発学会で直接投資や援助に関して、2000年を過ぎてからは日本評価学会で評価に関わる課題について研究発表を行ってきた。2003年には開発経済学者の速水佑次郎先生の監修で秋山孝允夫妻との共著「開発戦略と世界銀行：50年の歩みと展望」を出版した。戦後の開発援助戦略を経済学の理論を背景とした世界銀行の戦略を中心にレビューしたものである。

大雑把に言えば、私は当初は経済開発に、MDGsができてから社会開発に焦点を移行してきた。最近は政治・ガバナンス開発に関心を持っている。

## 教育

教育活動はJICAの職員向け研修から始まった。同時に各種研修事業で講師を務めた。更に、広島大学大学院、名古屋大学大学院、政策研究大学院大学でもプロジェクト・マネジメントに関する講義を担当した。2000年からは自分の母校でもある国際大学でも講義を行っている。現在は立教大学でも教えている。私のクラスには開発途上国の院生が多く、現地の課題についての議論から私自身学ぶことも多い。FASIDではベトナム、フィリピン、タイ、インドネシア等の海外での研修も頻繁に行った。研修テーマは保健医療、環境、評価等であった。国際大学でもインドネシアからの研修生を受け入れ、経済特区等の特定のテーマで研修を行ってきた。ここ数年、国際通貨研究所ではアフリカ開発金融機関の人材育成にも関わっている。日本での講義や視察を通じて、彼らの直面している課題の解決案を考えてもらっている。

## コンサルティング



陸路で通過するタイとカンボジアの国境

コンサルティング業務の魅力はプロジェクトの現場を訪問できることである。現実のステークホルダーやニーズを確認できることである。特に、PCMワークショップのモデレーター業務はステークホルダーとの意見交換と合意形成を通じてプロジェクトの計画を作成する業務である。JICAの中国の河北省草地プロジェクト、エチオピアの水資源開発・水供給プロジェクト、タンザニアのモロゴロ保健行政強化プロジェクト等でモデレーターを務めた。ケニアのバリント県半乾燥地域農村開発計画事前調査では一日

が終わると、頭も、体も、神経も疲労困憊した。しかし、この経験を発展させ、事例教材を作成することができた。資源と紛争をテーマにブルキナファッソやセネガルでは世界銀行研究所のセミナーで講師を務めたが、関係者分析をグループ間の紛争予防に使う方法等を議論した。最近では「南部回廊を中心としたメコン地域の連結性の評価」に評価主任として携わり、10日間ほどでタイ、カンボジア、ベトナムを陸路で横断した。途中で開発プロジェクト、政府機関、企業、流通施設等を訪問し、貴重な経験であった。

## インターンの育成

FASID は当時トップドナーとなった日本の援助人材を育成することが目的に設立された。様々な研修を行ったが、特に印象に残っているのはインターンの受け入れである。



ハノイの道路上の市場

大学院を修了した人材に対して、オン・ザ・ジョブトレーニングを行い、学問と実務の両立を狙った。延べ 60 名位のインターンが修了したが、多くは世界に羽ばたいて、国際機関や援助機関で働いている。この頃から、終身雇用制度とは異なり、学問的な背景と専門性を強化して自己実現を行うキャリア開発に関心を持ち、国際大学では定期的にキャリア開発セミナーを開催してきた。

## 外務省時代

公募で外務省の ODA 評価室長に採用された。外務省が担当している ODA の評価とは政策レベル、プログラムレベルの評価である。特に力を入れたのは評価部署を国際協力局から大臣官房に移転させて評価の独立性を強化したことである。また、それまで評価は開発の視点からのみ行われていたが、ODA の目的は開発と共に外交的目的もあり、外交的視点からの評価も行うようにした。国家公務員として仕事をしたことも貴重な経験であった。

## 仕事上の苦勞と喜び

国際開発の業務に携わってからは、好奇心が強くて仕事で特に苦勞したとは思っていない。喜びは毎回何らかの成果、結果を残すことである。研究事業では研究成果を生み出すことが喜びに繋がる。シンポジウムやセミナー等のイベントでは出来るだけ終わってから打ち上げを行い、関係者の間で喜びを形にすることにしていた。これが、この先へのやる気に繋がると思っている。

同時に、仕事をする、毎回、何か新しい事や人に出会うことも大きな喜びである。国際開発分野では非常に有能な方々と仕事をする機会に恵まれた。先輩、同僚、後輩を問わず専門知識や経験を持っている方々が多く、大変に勉強になった。特に SRID 会員には仕事の様々な場で助けられた。現在までの仕事のキャリアを振り返ると、SRID に入会したことが大きな契機となったことが解る。

## 社会活動

1987 年以降 SRID では幹事や SRID ジャーナルの編集委員を務めてきた。2012 年以降、日本評価学会の理事、2015 年から 2017 年まで APEA (アジア太平洋評価協会) 副会長を務めた。2 週間に 1 回の頻度で、日曜日の夜にアジアのメンバーとスカイプ会議を行った。時差があるため、終了はいつも夜中の 12 時近くであった。互いに背景や考え方に違いがあったものの、ハノイで第一回のコンフェレンスを開催できた。日本ネパ

ール協会でも監事、理事、業務執行理事を務め、2014年には50周年記念誌を編纂、出版した。

### 趣味

学生時代からジャズが好きだったので、2005年ごろからジャズピアノを始めた。今は、吉祥寺を拠点としているアマチュアのジャズオーケストラでピアノを担当している。年齢も職業も多様であり、社会人のクラブ活動の様を呈している。それぞれ違う楽器を持ち寄り全体としてハーモニーを作るのは楽しい。最近では、毎月1回程度の出演の機会もあり、演奏活動に生きがいを感じている。

### 私の生き方

銀行時代から自分の興味のあることを、組織の枠内で仕事にしようと努力してきた。国際開発分野の仕事については、幸いに興味と仕事がほぼ一致していたために、大きなストレスは感じていない。私が国際開発分野に入ったころは南北問題、すなわち途上国は先進国には追いつけないのではないかとといった危機感が大きかった。その後、新興国等に見られるように急速な経済成長を見せる途上国が多く輩出してきた。世界情勢が大きく変化しており、新しい知識を身に着けるべく常に勉強が必要だと感じている。